

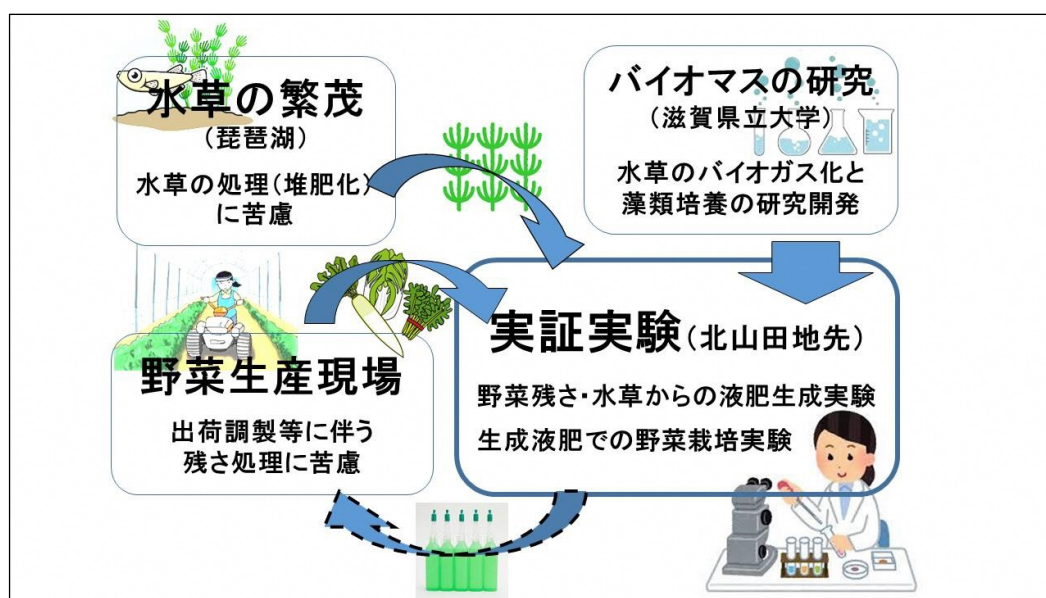
■野菜残さ・水草等の液肥化・利活用実証実験

市では資源循環型農業の実現を目指し、野菜の出荷時に除かれる部分や、規格外の野菜残さ、水草をメタン発酵させて液体肥料を生成する実証実験を2017年度（平成29年度）より支援しています。市は野菜残さや水草などを発酵させ、発電や藻類培養に活用する研究を行っている滋賀県立大学と連携し、2年間の計画で液肥の生成方法や地域内での有効活用についての検証を行います。

滋賀県の「琵琶湖保全再生施策に関する計画」においても、琵琶湖の水草除去および活用については推進施策として掲げられています。



北山田漁港に設置された実験プラント



野菜残さ、水草等の液肥化・利活用実証実験

【滋賀県「琵琶湖保全再生施策に関する計画」に示された「水草の除去」に関連する事項】

(3) 生態系の保全および再生に関する事項

④水草の除去等

- 琵琶湖の生態系や水産資源を回復させ、湖底底質の保全および改善や腐敗による水質悪化の防止、悪臭の防止等による生活環境の改善、船舶の航行の安全確保等を図るため、大量繁茂が課題となっている南湖をはじめ琵琶湖において水草の根こそぎ除去および水草刈取船による表層刈取り等の対策を推進する。
- 除去した水草は堆肥化して住民等に配布するほか、ビジネスモデル等の仕組みづくりへの支援などにより、有効利用を推進する。
- 水草の効率的な刈取り除去や有効利用を促進するため、対策手法の検討や技術開発に係る支援を行うとともに、抜本的な課題解決のために必要な調査研究を実施する。

■ホンモロコの養殖

市では、伝統の味を伝える産業として、2004年（平成16年）にホンモロコ養殖について調査研究をはじめ、2005年～2006年（平成17～18年）には休耕田を利用して養殖の可能性や採算性の検討を行いました。

2007年（平成19年）以降、養殖技術向上のための勉強会の開催や道の駅草津や地域のふれあいまつり等での販売、飲食店と連携したPR等を行ってきました。



ホンモロコの水揚げ

■地域資源の活用による活性化の課題と可能性（事業者ヒアリング）

・SOFIX 野菜※

課題としては土壌の分析に費用が発生することである。

現在、SOFIX 野菜を栽培している農家は8軒。耕作面積は増えており、野菜の商品価値を高める可能性があるため、JAとしては積極的に推進し、ブランド化を目指している。

コスト削減方法の検討ならびに分析費の補助などが求められる。

・あおばな

課題としては、あおばなの増産に向けては新たな設備投資（刈り取り機）が必要である。JAでは自主生産（栽培～製造）し、あおばな茶等を販売している。また、血糖値上昇を緩やかにする効能が注目され、需要が急増しているため、あおばなを使った地域活性化が期待できる。

効率的な設備投資について検討ならびに設備費の補助などが求められる。

・ホンモロコ

課題としては消費者ニーズの減少、生産者の高齢化による生産量の減少である。

生産組合を組織しホンモロコを養殖しており、2015年（平成27年）には草津ホンモロコとしてブランド認証されている。

・農業体験

課題としては体験までの育成・管理が大きな負担であり費用対効果があまり見込めないことである。

野菜収穫等の体験（特にいちご狩り）は、人気が高く、小学校等からの予約申し込みも多いため、農業経営者とイベント企画者等の連携により地域活性化に結びつける対策や支援が求められる。

・道の駅

課題としては道の駅の飲食施設には団体旅行等の予約申し込みがあるが、店舗や駐車場が狭く受け入れられない状況である。

道の駅での野菜等の直売は一定量を確保しており、一般的な野菜、果物、花き類が需要も人気もある。地域活性化となるニーズに即した支援が求められる。

※「SOFIX 野菜」とは、立命館大学で開発された「SOFIX（土壌肥沃度指標）」による土壌診断にもとづき、良質な有機物で最適な環境に整えられた土壌で栽培された野菜のことです。

(2) 観光

■観光資源としての琵琶湖

本市の観光は、琵琶湖周辺の「琵琶湖博物館」、
「水生植物公園みずの森」などの施設や、ツーリ
ング等で琵琶湖周辺を訪れる人が多くなっていま
す。烏丸半島で行われている「熱気球フライト」
や、「イナズマロックフェス」、「自転車ナイトレー
ス」等も、多くの人を訪れる一大イベントとなっ
ています。

滋賀県が2012年度（平成24年度）から取組み
を展開している観光ブランド“ピワイチ”は、特
にサイクリングコースとして認知度や人気は高ま
っており、今後もさらに琵琶湖を中心として県内
を周遊・体感するプログラムの創造、県内全域で魅
力ある資源の発掘を行い、一体的な観光地として
の認知度と評価の向上を図ることとしています。

また、滋賀県の「琵琶湖保全再生施策に関する計画」においても、琵琶湖の保全および再
生のための事項、琵琶湖保全再生施策の実施に資する体験学習を通じた教育その他の教育の
充実に関する事項に、観光に関連する項目が推進施策として掲げられています。



熱気球フライト

【滋賀県「観光交流」振興指針（平成26年策定）に掲げられた戦略の方向】（抜粋）

- 琵琶湖・滋賀をキーワードとしたブランドの創造と発信
 - ・滋賀の観光ブランド「ピワイチ」の推進
 - ・産学官協働による地域イメージ「滋賀・琵琶湖ブランド」の発信
 - ・多彩なイベント（音楽、文化、スポーツ等）の開催によるブランド発信
 - ・「食」をはじめとする特産品の発掘・開発やそのブランド発信の推進
- 滋賀の特色を際立たせる誘客活動の推進
 - ・琵琶湖での自然体験や農村での生活文化体験など、滋賀の風土を活かした体験型観光の推進
 - ・様々な素材の魅力を活かしたツーリズム（スポーツツーリズム、エコツーリズム、グリーン・ツーリズム、フードツーリズム、産業観光、アニメなどと連携した誘客等）の推進

【滋賀県「琵琶湖保全再生施策に関する計画」に示された「観光」に関連する事項】

- 農林水産業、観光、交通その他の産業の振興に関する事項
 - ・エコツーリズムの推進等
 - ・琵琶湖の特性を活かした観光振興等
 - ・湖上交通の活性化
- 体験型の環境学習の推進
 - ・農業体験、森林・林業体験、魚を学ぶ体験学習、琵琶湖博物館等における体験学習、自然観察会等



烏丸半島から見た琵琶湖

***** 琵琶湖の保全および再生に関する特別措置法の活用 *****

琵琶湖の保全および再生を図ることにより、住民の健康な生活環境の保持と近畿圏の発展に寄与し、あわせて湖沼がもたらす恩恵を将来にわたって享受できる自然と共生する社会の実現を目指し、平成27(2015)年9月に「琵琶湖の保全および再生に関する特別措置法」が施行された。これによって、琵琶湖が「国の資産」と位置づけられ、方針に基づく取組みについて、国が必要な支援を行うことが明確に示されている。

■神社・仏閣、その他歴史文化資産

当域の歴史文化については、湖辺に縄文・弥生時代の遺跡、南部丘陵地に古墳、製鉄遺跡が所在するほか、由緒ある寺社が点在しています。聖徳太子の開基と伝えられる「芦浦観音寺」、俳諧の祖・山崎宗鑑ゆかりの古寺として知られる「蓮海寺」などが残されています。「三大神社」の境内にある“砂擦りの藤”といわれる藤棚は圧巻で、近くの「志那神社」、「惣社神社」の藤とともに“志那三郷の藤”として、開花時期には多くの参拝者が訪れます。

「老杉神社」の本殿は国の重要文化財に指定され、神社およびその周辺で行われる風流囃子物の流れをくむ「サンヤレ踊り」も、重要文化財に指定されています。また、「上笠天満宮」の雨乞い御礼のための上笠天満宮講踊は、県の無形民俗文化財に選択されています。

「仙庵」には市文化財に指定されている木造大日如来坐像が納められています。「妙楽寺」の中庭には礎石と思われる石材があり、奈良時代の古瓦も残されています。「治田神社」の樹林帯はサカキの群落であり、市の自然環境保全地区の指定を受けています。

万葉集にも読まれている矢橋の地は、古代から港の機能を有していたと思われます。江戸時代には近江八景の一つ“矢橋の帰帆”として歌川広重の浮世絵や伊勢参宮名所図会に描かれました。現在「矢橋港跡」は琵琶湖に造られた人工島“矢橋帰帆島”の東側湖辺に位置し、都市公園（矢橋公園）として整備され、公園内に石積突堤が残されています。付近には最澄が創建したといわれ本堂が国の重要文化財に指定されている「石津寺」や、源頼朝が馬上から鞭でこの神社の森を指して名前を尋ねたことに由来する「鞭崎神社」があります。「南笠古墳群」は5世紀後半から6世紀中頃に造られた古墳群で、前方後円墳2基と半壊した円墳1基が現存しますが、江戸時代の文献“栗太志”によると、かつては22基の古墳が存在したと伝えられています。

「青地城跡」は鎌倉時代から室町時代にかけてこの地域を治めた青地氏12代の居城跡で、小槻神社と志津小学校および志津幼稚園の一角を城域としており、堀跡や土塁などの遺構を見ることができます。

■草津ものづくり職人

伝統的な金属工芸技術を礎に銀製のかんざしや帯留め等を制作している「銀峰工房」、草津の南部丘陵地の鉄分を多く含んだ瀬田シルトを使った草津焼の「草津焼淡海陶芸研究所」等、市内にはものづくり職人が所在し、各工房では見学や体験等をすることができます。



三大神社のフジ（市指定天然記念物）



矢橋公園に残る突堤跡



南笠古墳群（市指定史跡）



草津焼

■公園 等

「矢橋帰帆島公園」は、下水処理場のために琵琶湖を埋め立てた人工島に整備された公園で、公園内には、子どもの広場や大はらっぱ広場、せせらぎの池、遺跡の広場、キャンプ場、グラウンドゴルフ、多目的グラウンド、プール、テニスコート、ゲートボール場、相撲場などの施設があります。

「ロクハ公園」は、ピクニック広場や水遊び場、アスレチック、プールなどがあり、動物の飼育や小川の流れ等を活用した生物の生息環境により環境教育や自然観察会などの学びの場を提供しています。

「草津川跡地公園」は、市内を東西に横切り、まちよりも高い位置を流れる“天井川”であった旧草津川の跡地を活用し全長約7kmにわたり整備された公園です。このうち“区間2”「ai 彩ひろば」には、市民活動の場となるにぎわい活動棟やスクールガーデン、広場などがあります。

「葉山川」、「中ノ井川」、「伊佐々川」沿いは地域住民の散策やジョギングコースとなっており、ホテルやメダカの観測場所にもなっています。



矢橋帰帆島公園



草津川跡地公園（区間2）

■地域資源の活用による活性化の課題と可能性（事業者ヒアリング）

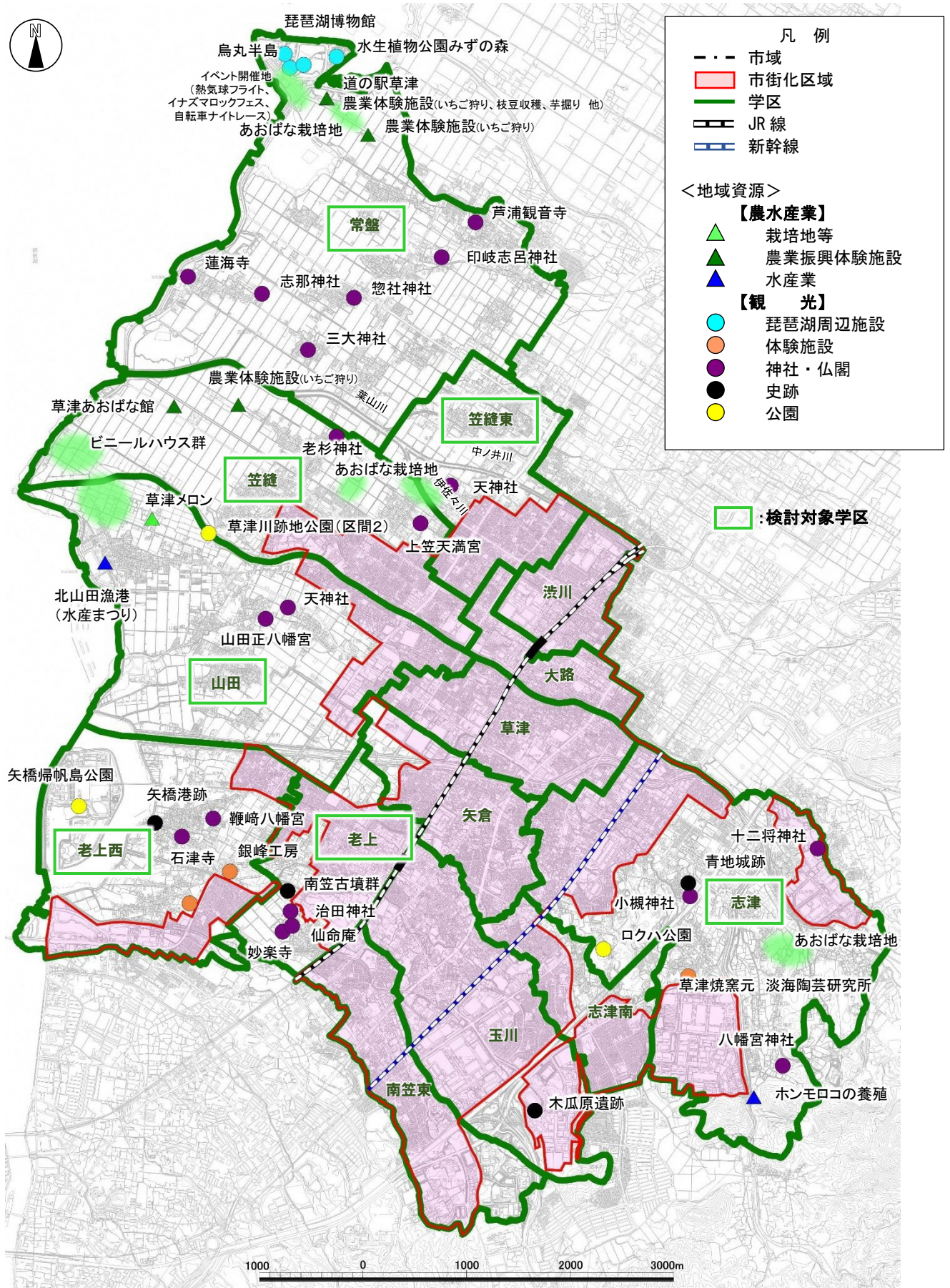
・ピワイチー周ロングランやレイクサイドマラソン等のスポーツイベント

課題としては、宿泊だけではなく、着地型※の旅行に来てもらえる魅力作りが求められる。

健康・スポーツに係るイベントは人気があり、近年増加傾向である。イベントと連携して地域の特産品等を販売したり、レイクサイドマラソンなどでは湖上交通と連携することで人気の底上げ効果が期待できる。

※「着地型」とは、これまでの旅行商品は旅行者のニーズを把握し情報を発信するのに便利な「発地型」が大半であったのに対し、消費者志向の多様化に伴い地元の人しか知らないような穴場や楽しみ方が求められるようになってきたため、地元主導で今までは旅行の素材としては考えられなかった地域資源を活用し、よりきめ細かく、多品種・小ロットで対応しようとするものです。地元にとっても新しい観光素材を掘り起こし、都市部の旅行会社に提案する着地型が地域おこしにつながるとして近年各地域で力を入れています。

図－8. 地域資源の分布図



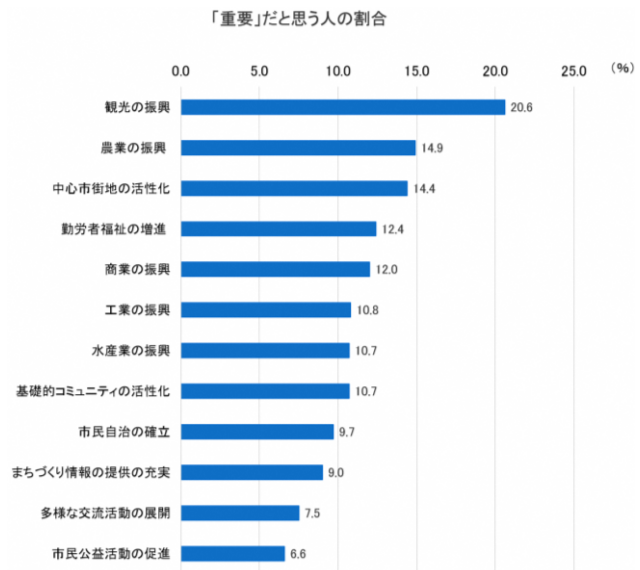
出典：草津観光ガイドマップ、草津ものづくり職人8人の挑戦／草津市観光物産協会、
草津が生んだ奇跡あおばな／草津あおばな会、自然環境保全地区保護樹木／草津市環境政策課
出典資料をベースに事業者ヒアリング、都市計画マスタープラン、まちづくり計画で挙げられた資源等を一部追加

5. 市民アンケート調査

(1) 活気があふれるまちをつくるための施策の重要度

毎年行っている「草津市のまちづくりについての市民意識調査」によると、活気があふれるまちをつくるための施策に関して“重要だと思う”と回答では、市全体で「観光の振興」が最も多く、次いで「農業の振興」、「中心市街地の活性化」となっています。

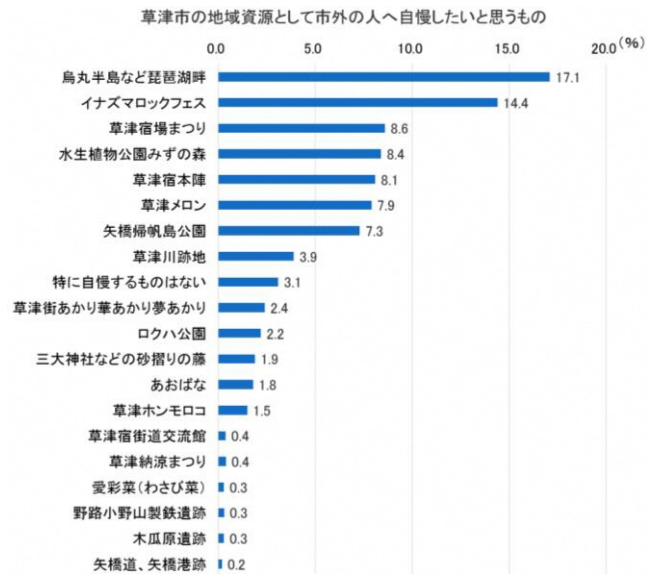
グラフー6. 活気があふれるまちをつくるための施策の重要度
(資料:平成29年度草津市のまちづくりについての市民意識調査)



(2) 主な地域資源としての認知度

草津市の主な地域資源としての認知度(市外の人へ自慢したいと思うもの)は、「烏丸半島など琵琶湖畔」が最も多く、次いで「イナズマロックフェス」、「草津宿場まつり」となっています。

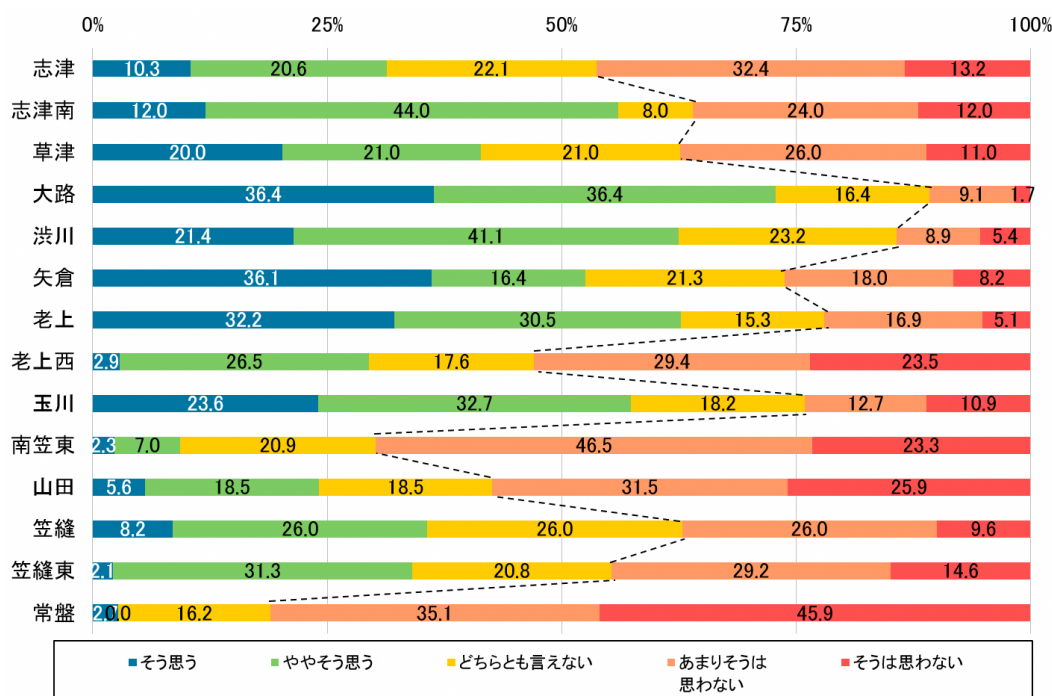
グラフー7. 主な地域資源としての認知度
(資料:平成29年度草津市のまちづくりについての市民意識調査)



(3) 公共交通機関の便のよさ

「公共交通機関の便がよいと思いますか」という設問に対し、対象学区の学区別では、常盤、山田で「あまりそうは思わない」「そうは思わない」との回答が半数以上となっており、公共交通に不便を感じている人が多い状況が見られます。

グラフー 8. 公共交通機関の便のよさ
(資料:平成29年度草津市のまちづくりについての市民意識調査)

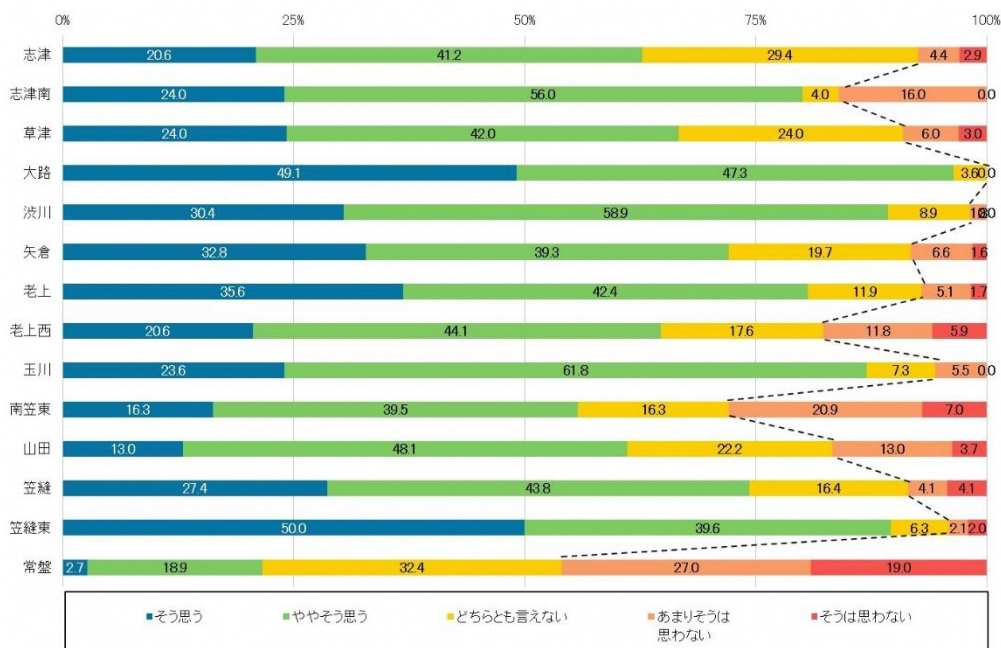


※「不明・無回答」の回答を省いているため、合計が100%にならない場合があります。

(4) 買物をする環境の整備

「買物をする環境が整っていると思いますか」という設問に対し、対象学区の学区別では、常盤で「あまりそうは思わない」「そうは思わない」が約1/2となっており、買物の利便性に不便を感じている人が多い状況が見られます。

グラフー 9. 買物をする環境の整備
(資料:平成29年度草津市のまちづくりについての市民意識調査)



※「不明・無回答」の回答を省いているため、合計が100%にならない場合があります。